

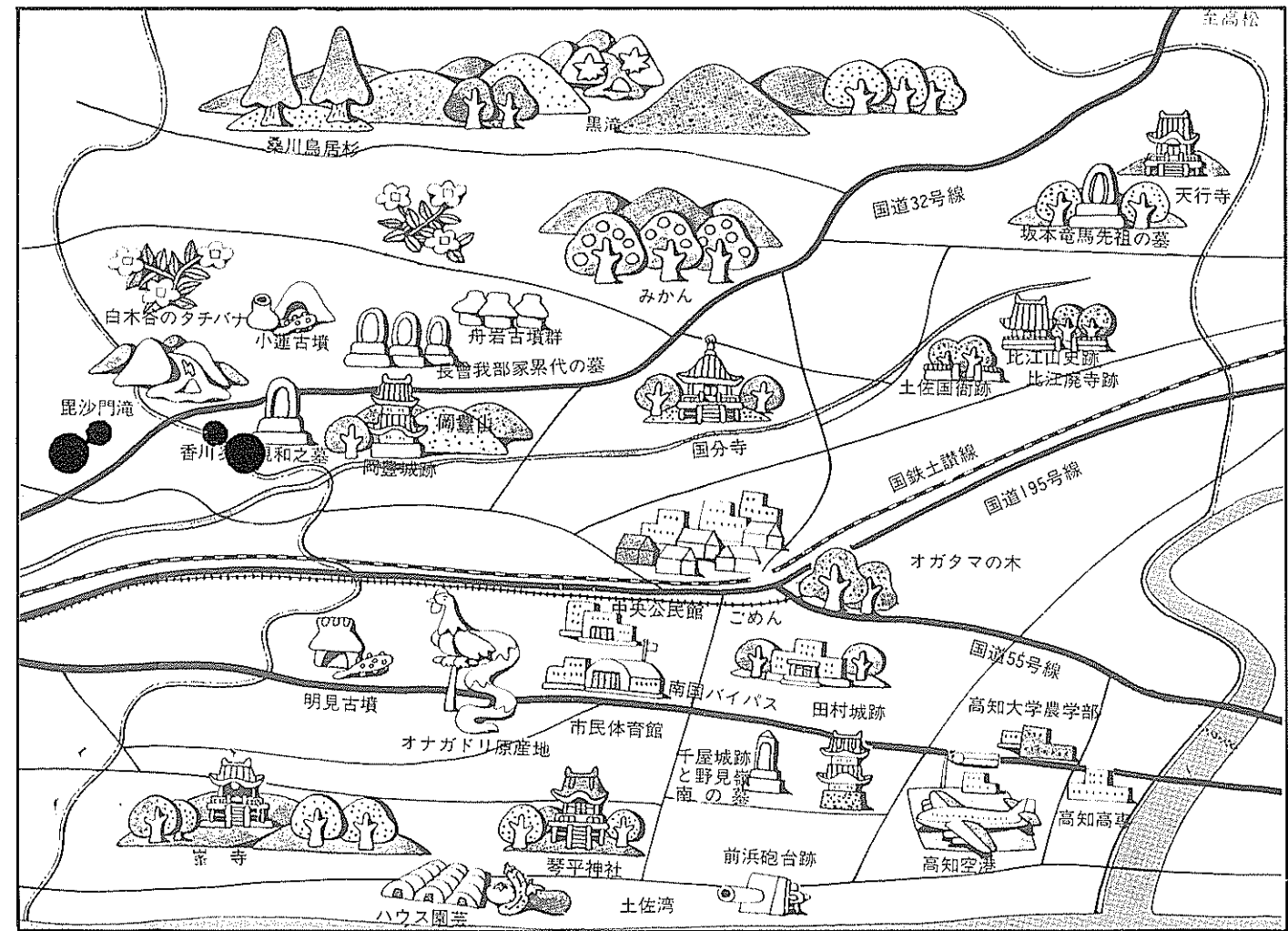
# 文化財をたずねて



南国市は古くから政治文化の中心地として栄えてきました。紀貫之で有名な国衙跡、国分寺、比江廃寺跡や田村城跡、岡豊城跡など、市は県下でも有数の文化財の宝庫として知られています。

たとえば国分寺。国分寺ができたのは天智元年（672）で、一面では土佐沖に海賊が出たりして未開でした。しかし当時、今日では名もわからぬ寺々がいかにかにかあったかというのを考えてみると人々は仏教を信じ、人の心の美しさを尊ぶを知っていたらどう想像されますか。

文化財はなんのへんてつもないうで実は大変深い意味をもっている。それは激しい風土の中で人間がかく生きぬいたという無言の記録であり、その一つ一つについてあらためて由緒をたずねてみればその小さな歴史的なたずまいが、私たちが豊かにはぐくんできたことを知ることができるでしょう。



国分寺・「寺は国華として、かならず好処をえらべ」という聖武天皇の勅命により、僧行基が、天平十一年（739）に開山した。真言宗四国霊場第二十九番の札所である本尊は、行基作の下手観音である。金堂および、薬師如来像、二体と梵鐘は、国の指定の重要文化財である。土壇は開基当時のもので、これもまた重要な文化財である。

▼土電バス 国分寺通り下車徒歩五分

国衙跡・土佐に国府、すなわち国庁を中心とする国衙がはじめておかれたのは、いつの頃であったかわからないが、八世紀のはじめには比江に国府がおかれていたと思われる。

この地には、府中・国府・内裏など、国府に関係のある地名が残り、また、古瓦や石仏などが出土して土佐の政治文化の中心地としての背がしのばれる。県指定の史跡である。

紀貫之が国司として来任したのは、延長八年（930）のことである。在任四年、任が満ちて承平四年京都に帰ったが、その紀行文が土佐日記で国文学史上有名なものである。その館跡は小公園となつて名

残をとどめている。

▼土電バス 国府小学校前下車、東へ徒歩で約五分

比江廃寺跡・比江の土居屋敷に一つの大きな礎石がある。比江廃寺塔の礎石であり、国の指定の史跡である。礎石には二段の円い穴があり、中の穴に仏舍利がおさまられていたもので、その上に五重の塔が建っていたものと思われる。昔このあたりに、道源寺と呼ぶ寺院があったという。その礎石かどうかかわからないが、かなり大きな礎石であったらしく、当時の豪族によって建立されたものである。

▼土電バス 国府小学校前下車、東へ徒歩で約十分、紀子郎跡（国衙跡）より東へ約四百メートル。

比江山史跡・比江山の名は、京都から赴任した国司が、故郷の比叡山をしのんで名づけたもの。

比江城は戦国時代の悲運の将、比江山掃部長宗我部親興居城の地であった。長宗我部元親は、あ

とつぎに四男の盛親をたてようとして、家中を集めて相談した。すると元親の従弟親興は、長幼の序を乱すものだとして、元親の怒りにふれて大高坂城下で切腹した。永源寺は、山内藩の家老乾家の菩提寺で、後々の墓域には、乾家五代にわたる大明塔の墓がある。

▼紀子郎跡北側の小丘

岡豊城跡・県指定の史跡である。長宗我部氏は初め「秦」といって秦・始皇帝から出ているといわれ、秦能俊というものが平安時代の末信濃からきて長宗我部氏の祖となつたと伝えられている。

兼序、国親、元親の三代が名高いが、中でも元親は土佐を平定、四国を統一し、更に天下に号令しようとしたが、天正十三年、豊臣秀吉の軍に敗れて、土佐一國を領すること許された。天正十六年（一五八八）には城を大高坂に移し、更に三年後浦戸に移したので、岡豊の地はしだいにさびれた。いまも一の丸、二の丸、うまや床、井戸、塹壕などが残っている。

小運古墳・朝倉宮の前古墳、大篠明見の彦山古墳とともに、土佐の三大古墳とよばれて、ともに高知県指定の文化財である。国道三十二号線ぞいの小運から北へ約三百メートル、小山のふもとに果樹園のそばにあり、すぐ近くには地質学上有名な、鏡岩がある。土佐では、約二百に近い古墳が発見されているが、その大半は南国市にある。